



TITLE:

北宋の經略安撫使

AUTHOR(S):

渡邊, 久

CITATION:

渡邊, 久. 北宋の經略安撫使. 東洋史研究 1999, 57(4): 655-689

ISSUE DATE:

1999-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155230>

RIGHT:

北宋の經略安撫使

渡邊 久

はじめに

一 緣邊安撫使

(一) 河北緣邊安撫使

(二) 陝西緣邊安撫使

二 經略安撫使

(一) 經略安撫使の登場

(二) 緣邊招討使の兼任

(三) 軍政統轄の構造

(四) 四路制の利害

三 經略安撫使の變貌

(一) 安撫使路の發達

(二) 行政監督官への展開

おわりに

はじめに

宋代の安撫使については、便宜上これを三つに分けて考えることができると思われる。すなわち體量安撫使、緣邊安撫

使、そして經略安撫使がそれである。

『事物紀原』では、安撫使の起源を唐代の觀風俗使に連なる職務であると説明している。⁽¹⁾ そうすると本来の「安撫」とは、各地を巡回して、地方官の才能、人民の疾苦や風俗の得失を觀察し、人々の生活を和らげ安んじる任務を意味していたことになる。宋代に實例を取ると、一、流罪以下の犯罪者の恩赦、一、納税免除などの手段をもって、人民を定住させる、一、邊境地帯において、異民族を宋朝の納税戸化する等々がすべて「安撫」⁽²⁾と呼ばれる行政的な措置に含まれる。したがって安撫は、軍事的任務とは直接には無關係であつた。宋初、太祖や太宗の時代には、災害の地域へ赴く宦官や、新たに收復した領土を巡回する中央政府の文官、あるいは武將や邊境の州の長官らが、その任務にあたる場合があつた。これはやがて體量安撫使に接續してゆく。⁽⁴⁾

ところが、『文獻通考』では、このほかに、宋の安撫使の起源を北魏の孝明帝の正光五年(五二四)に遡らせ、また隋代の河北道安撫大使をもそれに含め、安撫使の別の面を示唆している。⁽⁵⁾ つまり治安回復のため臨時に特派され、兵、民を安堵せしめる任務である。宋代では、第三代眞宗の咸平四年(一〇〇一)、党項の侵入により、宰相であつた張齊賢が文官の肩書きのまま軍團の總司令官である經略使となり、安撫使を兼任することがあつた。⁽⁶⁾ これが前例となり、澶淵の役(一〇〇四)では、張齊賢が青州知州として、青、淄、濰州の安撫使を兼ね、丁謂が鄆州知州で鄆、齊、濮州安撫使となり、兩者とも漕運の職および兵馬の權をもあわせて兼ねることとなつた。⁽⁷⁾ また、河北に侵入した契丹軍に對し、保州の部署であつた張燾を緣邊巡檢安撫使に任命し、副使一名、都監二名とともに北京大名府に駐留する二萬の兵力を統率して出撃させた。⁽⁸⁾ これら三つの事例は、いずれも軍事的職務と密着した形で安撫使が兼任されているところに特色がある。このような安撫使は、やがて緣邊安撫使、經略安撫使へと發達してゆく一つのステップにはかならない。そこで起こつた變化は一本道ではなく、次の仁宗時代の河北や陝西地方における緣邊安撫使、經略安撫使の展開、ひいては路の安撫使の發達とも深く關係している。したがって、そこには宋代の安撫使の本質を考察する重要な手がかりがひそんでいると思われるので

ある。

周知のように、宋代には、行政區劃である州縣の上に路という區分が設定され、そこに監司と總稱される行政の監督官が派遣された。ここで問題とする安撫使もその中に加えられている。ただし、安撫使の管轄する地域には、部署、鈐轄、都監などの軍政官たちが軍隊を管轄して一定の地域を擔當し、活動している。つまり、後述するように、安撫使は、それらの軍政官を統轄して、その地域の軍政に關與しており、同時に、行政の監督にも關わるという一面をもっていることになる。こうした安撫使の路は、監司の中心的存在である轉運使の路とは一致しない場合もある。すなわち安撫使は、監司という枠組みの中でも、獨自の性質を有していたと推測できるのである。

宋代の監司については、宮崎市定氏、梅原郁氏らの研究がある。⁽⁹⁾私も轉運使や提點刑獄のほか、安撫使をはじめ鈐轄、都監をも含めて總合的に考究する必要があると考え、鈐轄および都監については、別に考察を加えたことがある。⁽¹⁰⁾その一環としてこの小稿では、安撫使のもつ獨自な性格を解明するために、おもに北宋時代の經略安撫使の實像を探ることにしたいと考える。

一 緣邊安撫使

(一) 河北緣邊安撫使

景德三年(一〇〇六)、眞宗は知雄州に河北緣邊安撫使を兼任させ、また安撫副使、安撫都監を設けて、その官衙に常駐させた。⁽¹¹⁾その後、知雄州兼河北緣邊安撫使に就任した李允則は、十四年間にわたり雄州を治めたが、史書にはその閒の様々な活躍が伝えられている。⁽¹²⁾それらは以下に述べるような緣邊安撫使の組織によって支えられていたのである。

北宋時代を通觀すると、河北緣邊安撫使がその官衙を置く雄州は、契丹との正式な外交使節である國信使の往來宿泊の

地であり、契丹との問題について、直接に交渉する正式な窓口ともなっていた。⁽¹³⁾ これらの交渉の内容は、たとえば、榷場以外の場所での通商の禁止や、⁽¹⁴⁾ 通商幹線道路の安全確保、⁽¹⁵⁾ などのほか、國境地帯の居住民の問題をも含む。雄州兩屬戸と呼稱される緩衝地帯の蕃漢雜居民に對する徭役免除や、⁽¹⁶⁾ かれらが越境して耕作する問題、⁽¹⁷⁾ あるいは災害時の補償等々、この地域特有の問題も存在する。また、契丹との國境の畫定問題は、縁邊の堡寨の増築および軍馬を阻止する目的で行われる植林、⁽²⁰⁾ あるいは御河の改修や塘濶の増修などとも通底している。このように多方面にわたる問題は、兩國間の紛争の火種と常に密接に關連していたために、州に設けられた通判、幕職官をはじめとする職員のかにも、⁽²²⁾ 軍事を擔當する河北縁邊安撫使、副使、都監とその屬官たちが受け持つ必要があったのである。ここに雄州の長官が安撫使を兼任する意味が讀みとれるように思う。

また、河北の國境地方では、契丹からの密偵が暗躍し、妄言を流布して、住民を混亂させようとする事態が頻發して⁽²³⁾ いた。同時に、密貿易も横行し、⁽²⁴⁾ 榷場にも契丹の間諜がはいりこんでくる。⁽²⁵⁾ それらを取り締まるのも、縁邊安撫司の職責に⁽²⁷⁾ 數えられている。そのため河北縁邊州軍と縁邊安撫司にはそれぞれに密偵が置かれて、⁽²⁶⁾ 契丹との間で情報合戦が繰り廣げられる。このような密偵たちは刺事人、⁽²⁸⁾ 察子と呼ばれた。かれらの上級には、密偵を掌握する主管刺事人が存在する。河北縁邊安撫司には四人がおかれたが、そのほかにも廣信軍、順安軍に各四人、雄州、北平軍には各三人、霸州は七人、保州、安肅軍は各六人と必要に應じて設けられていた。密偵は使臣、職員、百姓から選募された者がこれに任命されることとなっていた。彼らの給料が一人三千錢と高額であったのも、多面的な探索諸經費を含んでいたためである。⁽²⁹⁾ この主管刺事人については、その人材の嚴選と能力の向上が、いつも問題にされたが、中には功績を上げ、奉職や差使、殿侍などの正式な下級武官に取り立てられるものもあらわれた。⁽³¹⁾ これらの諜報活動によって情報を吸い上げると共に、毎年、安撫副使と都監に、管内を巡回させ、安撫副使の巡回では、官吏や將卒の勲功、業績を詢察し、政府に報告する任務を課した。⁽³²⁾ また安撫都監には軍隊と關わる屯田政策から、兵士の資質の嚴選までを含む軍事全般について觀察を行わせた。⁽³⁵⁾ なお、安

撫副使らの巡回では、すでに行政を監督し皇帝に報告するという點について監司の任務に準じる體裁を備えていることがうかがわれる。この場合の問題點については、仁宗の嘉祐元年（一〇五〇）、侍御史梁鼎の上言によると、「河北、河東緣邊安撫副使、安撫都監、同管勾安撫司公事使臣らが首都に出頭して皇帝に上奏する期間は一回に十日と限られている。ところが近年、みだりに口實を設けては滞在を長引かせ、政界の要路に働きかけて個人の利益を計るなど、本来の職務をおろそかにするばかりか、朝廷を混亂させる行動が目立つ。よって、滞留は十日に限るという天聖年間（一〇二三—一〇三二）の命令をかさねて徹底しなければならぬ」と述べていることからある程度推測できよう。

史書に見られる、これらの事實は、緣邊安撫使の制度が河北の邊境の一州において、繼續的に一應の成功を収めていたことを示している。とすれば、河北緣邊安撫使司が常置された目的は、以下のように説明できるようなにおもう。

五代以降、藩鎮により州の民事軍事の兩方が掌られていたが、宋では藩鎮の機構に中央官僚を食い込ませ、徐々にその權力を奪い、最終的に藩鎮をも消滅させ、中央集權化を推し進めた。その一環として、軍隊においても、藩鎮の軍團を禁軍に再編成し、そのうえで軍隊の指揮權と、それ以外の軍事上の實務を掌る軍政權とを分離させた。しかも、それを複數の軍政官に分擔させていたのである。しかし、國內統一後も雄州のような軍事的要衝には、依然として藩鎮の舊例にしたがって民事と軍事を兼ねる官職が必要となる場合があった。すなわち、契丹との交渉や貿易の窓口であるこの場所には、治安維持と國境警備のための恒常的な軍勢力を必要としていた。こうした軍隊は、本来は雄州の鈴轄や都監により管理されていた。⁽³⁷⁾ただし、戦闘部隊である禁軍が州に駐在する場合、宋代には、知州が部署、鈴轄、兼管某々州駐泊兵馬事のいずれかを兼ねるのが通例になっていた。⁽³⁸⁾すでに雄州には、軍政官としての鈴轄、都監が駐在しているので、知州は彼らを統轄する權限が無くては不都合である。宋は、それに文官の職名である安撫使を用い、知州に兼任させ、それらの軍政官を統轄させたのである。⁽³⁹⁾

(二) 陝西緣邊安撫使

緣邊安撫使の名稱が用いられたのは實は陝西の方が早い。すでに眞宗の時代、西方にはようやく反抗の色を濃くした党項族の李繼遷が割據していた。しかし彼の死去に伴い、党項と宋の間に一時的に和議が結ばれるが、その際に、直接交渉に當つた宦官の張崇貴によって「緣邊安撫使」の設置が提案された。このことを『宋會要』では次の如く述べている。

兵部侍郎、知永興軍向敏中を以て西路沿邊安撫使に充つ。是より先、賊遷死す。延州路鈴轄張崇貴言う、乞うらくは朝廷自ら使を遣りて弔問せしめん。仍お望むらくは大臣を遣りて邊上に至り、賊の親信する所の張浦を召して定義せしめん。故に敏中に命じてこれを經度せしむ。『宋會要輯稿』（以下『宋會要』とす）。職官四一—八二、景德元年（二〇〇

四）五月一日）

党項族との交渉には、現地で指揮に當たる責任者を置く必要があつた。そこで京兆府の知事であつた向敏中を臨時に緣邊安撫使に任じて、事に當たらせたのである。⁽⁴⁰⁾ただ實際は、鈴轄の張崇貴が向敏中の後ろで實務の一切を取り仕切る仕掛けであつたようだ。⁽⁴¹⁾

やがて党項族の後繼者李德明と盟約が成立すると、張崇貴は緣邊安撫使を官局化させるよう働きかける。張崇貴の主張では、党項の根據地夏州から中國内地に至る道には、鄜延と環慶の二方面があり、現在、環慶路に入る情報や党項からの貢物や文書類もすべて延州でまとめて検討のうえ處理しているという實情に基づき、いま置かれている緣邊安撫使を正規の官局として常設したい。そこには向敏中のような宰相級の大臣ではなく、邊境の事情に詳しい、實務官僚を拔擢することが望ましいというものであつた。その提案は、結局は見送られてしまい、この時の緣邊安撫使は臨時のものとして終わった。⁽⁴²⁾

このようにして陝西の緣邊安撫使は一時斷絶したが、その後、河北に緣邊安撫司が置かれて軌道に乗ると、それが再び陝西にも應用され、眞宗の大中祥符八年（二〇一五）に、安撫使が任命された。當時、陝西に居住する青唐族の酋長たち

が党項討伐を提唱して、宋に歸順する意志表示がなされ、その對應役として曹瑋が緣邊安撫使に拔擢されたのである。⁽⁴³⁾ 彼は、それまでの涇原路の軍政官である駐泊都鈐轄と知渭州を兼務していたが、これ以後は知秦州として緣邊都巡檢使と涇原儀渭州鎮戎軍の緣邊安撫使を兼任することになった。⁽⁴⁴⁾ すなわち秦州の軍團を統率し、あわせて緣邊安撫使として、涇原路方面に駐在する軍政官たちを統轄したのである。⁽⁴⁵⁾ そのとき官局化の象徴である安撫使の印が鑄造され、支給された。⁽⁴⁶⁾ また毎年三百萬錢が公用錢として給付されることになり、これにより官局運営の經費も確保される。⁽⁴⁶⁾ さらに緣邊安撫司に副使のほかに安撫都監を設けるよう願ひ出たが、中央政府からは監視役ともいふべき走馬承受公事が送られてきただけであった。⁽⁴⁷⁾ その理由は、生粹の武人である曹瑋のもとに、軍政官がすでに多數存在していたという事情に求められよう。たとえば、秦州方面の軍政官は、この時すくなくとも秦州駐泊鈐轄高繼忠、同都監王懷信、渤海都虞候兼御前忠佐馬歩軍副都頭李恕らがあり、涇原路には、駐泊都監兼緣邊巡檢の周文質が駐留し、渭州の長官は權涇原路鈐轄の郝榮とほかに都監一名がいたことがわかつている。⁽⁴⁸⁾ よって彼の願ひ通り安撫都監を増設すれば、安撫使の統轄する軍政官は、既存の河北緣邊安撫使が統轄する軍政官の數を超える規模になる。それ故に安撫都監の増設はこの時點では見送られ、そのかわりに監視役ともいえる走馬承受公事の派遣となったと考えられるのである。

しかしその後、狀況はやや變化する。曹瑋による周邊諸異民族の安撫が成功をおさめ、秦州と渭州のあいだにある南市という軍事的要衝を占據して、禁軍および召募した三千人の弓箭手がそこに配置されることとなる。⁽⁴⁹⁾ ところがその直後、一旦は歸順するかに見えた宗哥族の酋長唃廝囉以下、蕃部諸衆が大舉して侵入し、宋と交戦状態に突入した。⁽⁵⁰⁾ 曹瑋は侵入を撃退したものの、知秦州の職を退いて、別に知州を任じてそれに民政權を譲り、自身は秦州都部署に轉職することになった。都部署は都監、鈐轄より上級の軍政官であり、管轄する兵力も多い。そのうえ依然、涇原儀渭州鎮戎軍緣邊安撫使を兼任していたので、彼は都部署として自ら管轄する軍隊を持ち、涇原路と秦州方面の軍政官を統轄する權限も有していた。そこに河北緣邊安撫使とは異なり、軍事上の權限においてさらに一步進んだ形態への變化を見いだすことができる。

つまりそれは經略安撫使の先驅けとも言えるものである。それでは次に、陝西における經略安撫使、都部署、招討使等兼任の實像を探るとともに、軍政統轄の構造について考察することにした。

二 經略安撫使

(一) 經略安撫使の登場

寶元元年（一〇三八）十二月、党項の李元昊の反亂が、當該地方の軍事を擔當していた鄜延路都鈐轄司から報告されると、中央政府は吏部侍郎の范雍を延州に派遣して、その知州とし、安撫使を兼任させた。延州は京兆府（長安）の北方にある軍事的要衝である。范雍は涇原秦鳳路安撫使兼鄜延路都部署、鄜延環慶路安撫使の肩書きをもち、鄜延路の軍隊を直轄すると同時に涇原、秦鳳路および環慶路を含めた地域の軍政官たちを統轄することとなった。⁽⁵¹⁾ 文官出身である彼はかつて陝西縁邊體量安撫使として、環、原州一帯の反亂鎮定に活躍した経験をもっていた。⁽⁵²⁾ また邊境政策では「安邊六策」を上言しており、⁽⁵³⁾ 对党項對策の矢おもてに立つ民事軍事の最適な責任者とも見なされていたのである。したがって武官コースを歩いてきた曹瑋の縁邊安撫使時代には許可されなかった安撫都監や安撫副使などの屬僚もこの時には設置され、安撫使直屬の軍隊も擴充されることとなり、⁽⁵⁴⁾ 知州、都部署、安撫使の三職責をすべて兼任する強力な指導者が出現したのである。もはや、河北と同じく縁邊安撫使の名稱を用いるには、その規模がちがいすぎていたと言えよう。

彼らが直ちに實行した党項對策は以下のようなものであった。まず、交易の窓口となる陝西、河東の榷場を閉鎖して、党項を經濟封鎖する。あるいは都署司、巡檢司に邊境の鎮寨に駐留する都監や監押などの中下級の軍政官らの仕事ぶりを査察させる。そのほかには、陝西諸處に雜居する熟戸⁽⁵⁵⁾と呼ばれる諸部族の動靜を把握して、常に安撫を加え、彼らの党項側への協力を未然に防ぐ手當を施したことなどである。なかでも急を要したことは、党項が軍事的に侵入した際の對應作

戦を確立し、その準備を進めることであった。ところが、そのための戦略に見通しを建てるのは容易なことではなかった。⁽⁵⁶⁾このことについて環慶路部署劉平は次のように述べている。

環慶部署劉平請うらく、陝西縁邊都部署司に下し、如し蕃寇鈔邊に遇わば、諸路をして兵を會して、こもこも應援を爲さしめん。これに従う。〔長編〕卷二三、寶元二年四月丙戌

これはすなわち、緊急の時は陝西の諸路が軍事面で應援しあう必要を訴えたものである。當時、陝西の中心、京兆府の知州には、乾耀等州の軍馬をも指揮する職權を持つ夏竦が本路都部署として起用されていた。政府からも、さっそく彼のもとに陝西安撫使龐籍らが派遣され、ともに戰略を議することになる。⁽⁵⁷⁾そこで、夏竦が立案した戰略の基本方針は十にのぼったという。⁽⁵⁸⁾それを承けて、鄜延、環慶副都部署の劉平に管勾涇原兵馬事を兼任させ、三路の連携に務めさせることになった。⁽⁵⁹⁾また一方で、陝西や河東の鈐轄に擔われていた兵甲、城塞の視察と情報収集を各路の兵馬司に擔當させるなどの軍政改善への流れも認められる。⁽⁶⁰⁾結局、約半年後の寶元二年七月、夏竦は知涇州、兼涇原秦鳳路縁邊經略安撫使に、范雍は知延州、兼鄜延環慶路縁邊經略安撫使、鄜延路都部署に就任した。⁽⁶¹⁾つまり涇原路と秦鳳路を夏竦に分擔させ、范雍は鄜延路と環慶路を受け持ち、二人の指導により戰略全體に一本筋を通そうというわけである。その決め手となったのは、次の記事に見られる夏竦の提案である。

乞うらくは諸路總管司の臣僚に指揮し、今後、事ごとに安撫司の指揮を遵稟し、怯懦自謀し、妄りに事理を説き開奏し、上は朝聽を惑わすを得ず。如し寇賊の奔衝する有らば、并びに須らく出兵し、險を守りて持重し、便を伺がいて殺戮を痛行せん。城を披らき敵を玩どり賊馬を放過し、他處に入らしむることを得ず。如し違わば、軍法を以て處分す。此の如き令の行下さるれば、則ち邊防畏懼の臣、預め戰鬪を謀り、敢えて只だ守城自全の計を作さず。〔文莊集〕卷一四

これは陝西諸路の總管司すなわち都部署司を安撫使の指揮の下におくことを意味したものである。經略安撫使の出現に

は、この夏竦の發言が影響を與えたと考えられる。そこでは文官の安撫使による軍政官指導体制の強化のために、軍隊の統轄者を示す經略使の名稱をそこにあわせ用いた點が眼目である。⁽⁶²⁾それは『夢溪筆談』の記述にみられるように、唐代の藩鎮が節度使などの使職を兼任するやり方に形式の上で倣うものであった。⁽⁶³⁾

(二) 緣邊招討使の兼任

康定元年(一〇四〇)正月、宋軍は延州の西方にある三川口で大敗する。政府は事後の處置をスムーズに運ぶために夏守贊なる人物を拔擢した。⁽⁶⁴⁾彼は、陝府西路の馬歩軍兵馬都部署の肩書きで軍隊を直轄し、さらに經略安撫使を兼任して軍政官たちを指導する。その上に軍隊の總司令官を意味する沿邊招討使の官名が加えられて、權限の強化がはかられた。⁽⁶⁵⁾その他にも監視役的存在として、宦官の王守忠が陝西都鈐轄に任じられるとともに、⁽⁶⁶⁾都大管勾走馬承受公事として二名の宦官が派遣された。⁽⁶⁷⁾補佐役としては、簽書陝西經略判官事が設けられた。⁽⁶⁸⁾なお轉運使の明鎬を陝西隨軍轉運使に拔擢して、夏守贊、王守忠らと共に軍政の協議をなさしめた。⁽⁶⁹⁾彼らの率いる大軍は陝西の東端にある河中府に駐留したが、その駐在は三箇月間にもおよんだ。⁽⁷⁰⁾その理由は、三川口敗戦前後の責任の所在を明確にして、范雍をはじめとして該當者を處分することにほかならず。⁽⁷¹⁾責任を問われた者たちがいづれも軍團を率いている現役軍政官ばかりであったので、彼らの萬一の暴發を抑止するためでもあったのである。結局は、その三箇月ほどで、夏守贊と王守忠は更迭される。「守贊、性庸怯にして、方略寡し。士卒の附す所と爲らず。河中より徙りて鄜州に屯するに、いまだ行くに及ばずして、亟に罷歸す。」⁽⁷²⁾と批評されたこともその間の事情を物語っている。ただし夏守贊の事例は、その後、陝西の經略安撫使が緣邊招討使を兼任する前例となったことは特記すべきであろう。

なお、同じ時期に、韓琦が陝西安撫使に、符惟忠が安撫副使に任命され、陝西の軍政に携わっている。⁽⁷³⁾また涇原、秦鳳路には、依然として夏竦が經略安撫使として、副使、權簽書經略安撫司判官事を從えて、涇州に駐留していた。彼らは、

内では案柵などの防衛施設の充實に務め、外には青唐族を懷柔して反党項勢力を形成しようとはかっていた。⁽⁷⁴⁾ つまり夏守贊の率いる軍團が軍政官交替を圓滑に行うための抑止力であったのに對し、一方では、夏竦や韓琦らの働きにより陝西の軍政が滞りなく進むよう企圖されていたわけである。

康定元年（一〇四〇）五月、夏守贊が陝西を去ると、替わりに夏竦が都部署、⁽⁷⁶⁾ 經略安撫使、緣邊招討使の三者を兼任して、陝西の軍事最高司令官となる。その副官には、陝西都轉運使の范仲淹が、韓琦と共に陝西經略安撫副使、同管勾都部署司事として任じられた。あらたに龐籍を都轉運使に迎え、ほかに經略安撫司判官、經略安撫司勾當公事が設けられ、夏竦、韓琦、范仲淹を中心にした新體制がスタートした。彼らの統御の下に、涇原秦鳳兩路で夏竦の後を承けた經略安撫副使の葛懷敏、權簽書經略安撫判官の尹洙などのほか、部署、鈐轄、都監らの軍政官が、陝西各地に配置されていたが、現實にはこの新體制をどのように運営していくかという問題が残されていた。鄜延鈐轄張亢の上疏によれば、「舊制では、諸路の部署、鈐轄、都監は二三人にすぎなかった。その他に一州の部署、鈐轄がいても、かれらは路の軍政には容喙しなかった。現在、諸路の部署、鈐轄、都監は十四五人にのぼり、少ない場合でも十人を下らない。みな路の事を兼任しており、權限は等しく、勢力あい拮抗して統制できない。およそ議論が有れば、互いに自分の意見に固執して一致しない」と⁽⁷⁸⁾あり、このことから陝西における軍政官の増加は、軍隊を中央政府の制御下に機能的に活用しようとする意圖に反して、現場での軍政の意思決定を非能率的なものとしてしまっていたことが知られるのである。

おそらくはそういった問題も含め、朝廷は康定元年（一〇四〇）八月にはいると早々に、夏竦らに根本的な對党項への戰略を討議させるため、⁽⁷⁹⁾ 宦官に皇帝の手詔を携えさせて永興軍へ特派した。そこであらわれた動きは次のようなものであった。まず韓琦は、陝西の各路に軍事教練の専門官を置き、各指揮單位の軍團から精銳二三十人を選抜して平羌指揮を新設することを提案した。これは五百人を一指揮として鄜延、環慶、涇原、秦鳳の四路におのおの各二指揮、士兵一指揮、屯駐駐泊兵士一指揮を置く増兵策であったが、その意圖をさらに詳しく説明する記述が、韓琦の上言のなかに見られる。

それによれば、「縁邊の部署や鈴轄の配下に屬する指揮使など戦場で直接兵士を指揮する部將たちは、おのおのが指揮する兵の戦鬪力をも承知せず、また兵士の方でも上に立つ部將の力量を知らないのが現状であった。先ごろ禁軍中の武藝優れた者を試験して、兵を訓練教習する寨守や監押などの役目につけたが、効果を得るまでには至っていない。さらに陝西都部署司から各路に十から十五員の教押軍陣の官を派遣して、その成果により賞罰を行うことにしてはどうか」というもので、これは、陝西における軍政の急務を指摘したものとなっている。

次に、もう一人の經略安撫副使である范仲淹は知延州を兼任し、現地において、獨自の行動を起こした。⁽⁸¹⁾彼は實際に軍團を率いて塞門寨に赴き、弓箭手を募り、土地を給付して、寨の復興に務めた。⁽⁸²⁾また、彼の意向を受けた延州都監は、党項軍と交戦しつつ、金明寨などの延州北方にある諸寨を復興したという事例もある。⁽⁸³⁾

このような范仲淹、韓琦らの盡力にもかかわらず、康定元年（一〇四〇）九月、鎮戎軍地域に党項が侵入し、三川寨を攻撃した。この時、涇原路都監らも出兵したが、撃破され、結局は乾溝、乾河、趙福の三寨が陥落、官軍兵士五千あまりが戦没するという事態に至った。⁽⁸⁴⁾その結果、今度は、韓琦が軍團を集結して一氣に李元昊の本據地である夏州へ進討する強攻策を推進しはじめることとなった。夏竦もこの進討作戰に賛成していた。⁽⁸⁵⁾ところが、范仲淹はなかなか韓琦の案に同調しなかった。韓琦の進討作戰は鄜延、涇原の兩方面から同時に軍を進めるというものであったから、鄜延路の軍事上の責任者である范仲淹が動かなければ、この案は實現しないことになる。范仲淹は延州にあって、張亢を都鈴轄に迎え、鄜延路と環慶路の諸寨を修築して、そこに軍兵を入れ武器兵糧を備蓄して、いわゆる「攻守全勝の策」を練っていた。實はこの間に、范仲淹は党項との講和策を進めていたのである。そして「元昊、人をして涇原において和を乞わしむ」とあるように、公式ではないにせよ党項から和平交渉の使者を迎えるに至ったのである。しかし、范仲淹の意圖が招納という形の講和にあることを知った韓琦は、ついに開戦に踏み切る。⁽⁸⁶⁾それについて次のような記事が参考になる。

是れより先、朝廷、涇原、鄜延兩路の兵を發して賊を討たんと欲す。議いまだ決せず。環慶副部署任福に詔して驛に

乗りて涇原に詣りて事を計らしむ。たまたま經略安撫使韓琦邊に行し、涇州に趨くに、謀者言えらく、元昊兵を折董會に關し、渭州に寇せんと謀る。己丑、琦すみやかに鎮戎軍に趨り、盡くその兵を出す。また敢勇を募ることおよそ萬八千人、福をして將いて以て賊を撃たしむ。涇原駐泊都監桑憚を先鋒と爲し、鈐轄朱觀、涇州都監武英これに繼ぐ。行營都監王珪、參軍事耿傳みな従う。〔長編〕卷二二一、慶曆元年二月

このようにして韓琦が派遣した軍隊は陝西路最強といわれる武將たちを集めていたが、それにもかかわらず、かれらは好水川で全滅する。この敗戦は、當然のことながら李元昊の獨立を決定的なものとした。韓琦はその責任を追求されたが、夏竦による口添えを得て、經略安撫副使を剝奪されただけで、知秦州として留任することができた。⁽⁸⁹⁾

一方、講和策の推進者であった范仲淹は罷免された。⁽⁹⁰⁾その理由は朝廷の方針である進討作戰に逆らい、彼が獨斷で李元昊と和議の交渉を進めたことによるというものであった。⁽⁹¹⁾

以上見てきたように、陝西地方において軍政官の多數化によってもたらされていた、軍政の意志決定の非能率は、韓琦や范仲淹の協力と指導力で、實質的には解決されたかにも見えたが、結局は軍事上の成果を得ることはできなかった。韓琦と范仲淹が解任された後にも、陝西の軍政を如何に統轄して行くかという問題は依然として残されていたことになる。そこでつぎに、陝西經略安撫使に關する軍政統轄の構造について、さらに立ち入って調べてみることにする。

(三) 軍政統轄の構造

かつて藩鎮に掌握されていた發兵、指揮、軍事行政の權限は、宋朝においては部署、鈐轄、更に下級軍政官である都監や監押などに分擔されている。戦場で兵士を指揮する指揮使以下の部將も、各々の所屬する部署、鈐轄、都監、監押の命令に従うことになった。部署以下の軍政官たちは官位に高低の違いはあるものの、中央政府の任命した武臣官僚であるから、それぞれの規模で地方に駐留している軍團を、中央政府の管轄下におくことができるという筋道がたつことになる。

唐末五代の後をうけ、藩鎮の軍團を中央政府に回収してゆく過程で、宋朝はこのような軍政官を生み出し、さらにはそれによって兵權を階層化して分擔させ、武人の專權を許さず、軍閥の形成を防いだ。そこに宋朝の軍制の特徴がある。⁽⁹²⁾このようなシステムにより中央政府が発兵權を握り、最終的に軍隊を統制していたわけである。しかし、發兵が一刻を争うこの時期の陝西において、逐一政府に發兵命令を仰いでいたのでは勝負にならない。そこで政府は發兵命令傳達の仕組みを制度化し、その對應策を講じた。これが銅符、木契、傳信牌などの制度であった。それによると、銅符は樞密院から部署、鈐轄、知州軍に發兵命令として出され、木契は部署、鈐轄から各地に駐留する軍團への發兵命令に使われ、傳信牌は軍の主將が発する命令に用いられるものであった。⁽⁹³⁾さらに考慮すべきは、隨時變化する戰況に應じて、戰爭の進め方を逐一政府に問い合わせる暇はなかったので、現場での戰略作戰における裁量權を意味する「便宜行事」の許可が必要となることである。ただしそれは攻守、進退、方略について事後報告と結果責任をともなった權限であった。康定元年（一〇四〇）九月、夏竦にそれが與えられたが、⁽⁹⁴⁾そのことについて次のような挿話が傳えられている。

〔夏〕竦、幕職の軍官を集め、五路の進討を議す。凡そ五晝夜、人を屏し吏を絶ち、謀るところ祕密とす。軍馬を處置し、糧草を分擘するに、みな文字有り。已に書を成し、兩人の力、擧ぐるこゝ能わず。一大櫃中に封鎖す。一夕、これを失う。竦進兵の議遂に格む。此れ由り、懇ろに解罷を乞う。（孔平仲『談苑』卷一）

夏竦が、幕職の軍官と五晝夜にわたって、密議し、兵馬の處置と軍糧の配分を計畫して、それを文書に作り上げたというこの話は、夏竦の任務をよく反映したものとなっている。

さて、彼の如く、都部署、經略安撫使、緣邊招討使を一人で兼任すれば、そのあいだには自ずと官廳の一體化ともいへべき傾向が現れ始めることになる。たとえば次の韓琦の言、すなわち、

韓琦言う、陝西經略安撫司と部署司、およそ行事有れば大率相通ず。ただ是れ經略司のみ判官二員有り。乞うらくは經略判官をして參詳都部署司事を兼ねしめん。これに従う。（『長編』卷二二九、康定元年十二月壬寅）

は、經略安撫司の判官が都部署司に混在していることを、制度上認めるように提案しているのである。また、かつては武臣の官職である都部署に、文臣が就任した場合は經略使と稱するという先例があったにもかかわらず、夏竦はその兩者を兼任し、官名の使用上にも融通がはかられて、陝西における經略安撫司と都部署司の一體化が進む下地ともなったと(95)考えられる。また「縁邊招討司に詔して、戰士の首級を市いて賞を冒かす者は、論するに軍法を以てす」と(96)あつて、都部署の行う軍事行政に屬すべき任務が招討司に課せられた記述があることから、この傾向の進み具合をうかがうことができる。つまり、招討使司、經略使司、安撫使司、都部署司などが、夏竦という人物に統轄されると、あたかも一つの組織のごとく機能し、それらが軍事全般に携わっているという實狀であつたのである。しかし、そのように権限を集めても彼らは軍事的成果を出せないままであつた。本來、宋代の官制において、個人の專權が許されないことは言うまでもない。そこで夏竦らによる體制に、見直しがはかれることになるのだが、ことはすんなりとは進まない。

まず、韓琦、范仲淹らが解任されるが、その後も、夏竦は依然として陝西都部署兼經略安撫使、縁邊招討使、判永興軍に留任したままであつた。ところがここで陳執中が知永興軍として同陝西部署、兼經略安撫縁邊招討等使に任じられたのである。(97)この陳執中の下には、副使、陝西鈐轄が設けられ、さらに陝西安撫招討都監など直屬の官職も置かれる。(98)つまりは夏竦の專權を防ぐためである。そのあと、事態はさらに進展する。すなわち、

新知永興軍孫祖德を改め知河中府とし、新知河中府、吏部侍郎范雍を知永興軍とす。初め、夏竦に命じて判永興とす。また陳執中を以て知永興とす。兩人分れて按邊に出するに及びて、府事を領すこと猶お故の如し。乃ち復た雍をして京兆に守たらしむ。是に於いて、一府に三守あり。公吏奔趨往來し、その擾に勝えず。昔より未だ嘗て有らざるなり。(『長編』卷二三、慶曆元年六月壬午)

と記されているように、夏竦は軍隊を率いて鄜州に駐屯し、陳執中も永興軍を出て涇州に屯することになった。(99)よつて永興軍つまり京兆府には、事實上は知事不在となる。そのため新たに范雍を知事に任命したわけであるが、夏竦と陳執中、

さらに范雍をくわえた三人が、それぞれ名目上では知事であるため、事務手續き上の混亂を招いたと言うのである。

軍隊は、鄜州に駐屯する夏竦と、涇州に屯する陳執中の兩者に分割し、その歸屬先をあくまで陝西の中心である京兆府におき、范雍が知事としてそれに關わる。このようにして、現役の陝西經略安撫招討使の權限は分擔されることになったのである。これが永興軍に三人の長官が任命された理由にほかならない。

ところで、建前としては、三者の間に緊密な協力が成立して、彼らの意志統合の結果による機能的な軍政の運営が期されていたはずである。しかし、これは專權を防止するためのやむを得ぬ措置であつたこともあり、彼らの協力は現實的には難事であつた。したがって、別に陝西安撫使として王堯臣が臨時派遣されたのも、このような事情を配慮してのことであつたと考えられるが、それもさほどの効果がなかつたように思われる。なぜなら、夏竦と陳執中の間の確執は、所屬下の軍政官にも混亂を生じさせていたからである。すなわち鄜延都鈐轄の張亢と部署の許懷徳の間に生じた不和がそれを反映している。次の記事は、そのときの張亢の言い分を述べたものである。

今邊事を言う者は甚だ衆し。朝廷或いは即ちに奏可し、或いは定奪以聞せしむ。或いは逐處に割下し、或いは下司に令せず。前條方めて遂に施行され、後令復た即ちに衝改せらる。胥吏鈔錄の勞有り、官員看詳の暇無し、邊陣の軍政、一として定制無し。臣疑う所の者六なり。夏竦、陳執中、皆朝廷の大臣。凡そ邊事有らば、當にこれに付して疑わず。今ただ文書を主どり、詔令を守るのみ。毎に宣命有らば、則ち翻錄し行下す。如し諸處申稟すれば、則ち朝廷の指揮を候たしむ。かくの如ければ、則ち何ぞ必ずしも大臣を以て事を主らん。〔長編〕卷一三三、慶曆元年七月己酉〕

これは張亢の述べるところの軍事問題のうちのひとつであるが、邊境の戰陣における軍政の不統一を指摘している。また、同條には、夏竦と陳執中は經略安撫使でありながら爲す術なく、決められた範圍のことだけしか行わない。朝廷の命令が届くと、複製して關係部署に差し下し、また、下部組織から上申書が提出されると、ひたすら朝廷の裁斷を待たせるのみである。それらのことから、その差配を承くべき都鈐轄や部署の間に解釋の不一致があるのは當然であると論じてい

る。このように権限の等しい、複数の軍事長官を置くことは、彼らに所屬する陝西全域の軍政官たちの間に、思わぬ深刻な混亂を招くことになった。そのため、今度はその對應策として、陝西路をいくつかの軍事路に分割する案が持ち上がるようになったのである。

(四) 四路制の利害

夏竦、陳執中とも爲すところなく、慶曆元年（一〇四一）十月甲午、夏竦は判河中府に、陳執中は知陝州となつてその職を離れた。⁽¹⁰¹⁾ そのあと新たに陝西は四つのいわゆる軍事路に分割された。秦鳳路は知秦州に、涇原路は知渭州に、環慶路は知慶州に、そして鄜延路は知延州に、それぞれ路の都部署と經路安撫使、緣邊招討使を兼任させることになったのである。⁽¹⁰²⁾ こうして分割された陝西の四軍事路の中では、どのような仕組みで軍政が行われていたのであらうか。それについて慶曆二年（一〇四二）正月庚戌の條には次のような記載がある。

詔すらく、近ごろ陝西緣邊を分かちて四路と爲し、おのおの經路安撫招討等使を置く。自今、路分部署、鈐轄以上は、都部署司と軍事を同議するを許す。路分都監以下は、並びに都部署等の節制を聽く。違う者は軍法を以て論す。

（『長編』卷一三五）

右の記事によれば、夏竦のような陝西路全域の軍事を統轄する長官はすでに廢されたので、各路の經路安撫使は路分部署、鈐轄と、より緊密に協議することが求められている。いわば軍政の衆議方式である。經路安撫使の文書には「都總管（都部署、副總管、鈐轄、都監が共に簽書する）」という規定があるのもこのためである。⁽¹⁰³⁾ ただその場合、問題がないわけではない。朝廷が都部署司に下す機密文書について、都部署司の官員が多すぎて衆議がまとまらないばかりか、機密漏洩の危険もでてくることである。そこで今後の機密文書は、まず招討使に下されるようにという、范仲淹の一言が見られるのである。⁽¹⁰⁴⁾ また賈昌朝も、衆議の問題を次のように分析している。「陝西四路は部署より以下、鈐轄、都監、巡檢まで、

軍政にはかならず参豫する。そのために謀議がまだ成立しないうちに、内容が先に漏れてしまうので機密保持ができない。一方が可とするものは、もう一方が否とし、上が行えば、下はそむく。主將がいると雖も、命令を専斷できないので、命令が徹底できず、軍を動かせば、必ず敗れる。したがってその對應策として、今後は、將を命じる際に、疑いを差し挾まず、權限を許される帝恩を諭し、ささいな失敗を責めず、功績を得ることだけを義務づける。兵への爵賞、威刑は隨時裁量を許す。副官以下、命令に従わない者があれば、軍法を以て論ずることにする。筭權賦稅、國庫の物に至るまで、みな用いることを許可する⁽¹⁰⁵⁾。そこでは陝西の四路制の缺陷が指摘されており、やはりある程度の裁量權を持つ長官が必要であると考えられていたことがわかる。

結局、慶曆二年（一〇四二）四月の定川寨の敗戦を機に、再び軍事の總司令官が置かれることになった。そして、夏竦の時の經驗からここでも范仲淹、韓琦、龐籍の三人に陝西四路をあわせた都部署、緣邊經略安撫招討等使の任務が與えられ、三者による指導體制が施かれたのである⁽¹⁰⁶⁾。一方、依然として四路それぞれにも經略安撫使が任命されていたし、その後、永興軍にも部署兼本路安撫使が設置されたので、事實上、陝西は五つの軍事路に分割されることになった。つまり、范仲淹らが陝西の軍事長官に任命されたとはいえ、陝西の各路にも經略安撫使が存在して、管轄區域の軍政官たちを統轄することになる。これでは范仲淹の命令と各路の經略安撫使のそれが齟齬する場合、諸處の軍政官たちに混亂が生じることとは必至である。そこで、慶州の長官から「韓琦、范仲淹、龐籍がすでに四路の招討使を兼任しているので、各路の經略安撫招討使たちはその節制を承けるべきである。現在の官職の名號は適當でない」との上官があったのをうけて、まず諸路の招討使がすべて廢止された⁽¹⁰⁷⁾。さらに各路の都部署、副都部署で經略使を兼任するもの九人が、經略の職名を罷め、とりあえず緣邊安撫使と稱することになった⁽¹⁰⁸⁾。このように、招討使、つづいて經略使と、次々にその官職を取り上げたので、相對的に、韓琦、范仲淹、龐籍の軍政指導體制が確立し、官制上は一應のまとまりを備えることとなった⁽¹⁰⁹⁾。

ところが、慶曆三年（一〇四三）の三月、朝廷では宰相呂夷簡が現役を退くという一種の政變が起こり、さらに四月に

は党項の李元昊と和議の盟約が成立することになると、范仲淹、韓琦は樞密副使として中央政界に復歸して陝西をあとにする。陝西四路經略安撫招討使という官職はそれ以後も繼續されたが、慶曆五年（一〇四五）二月ふたたび陝西の各路に都部署、經略安撫招討使が復活される。⁽¹¹⁰⁾すなわち范仲淹らの召還により、陝西を統轄する軍事長官の名目は残されたものの、實質上は各路の經略安撫使に軍政が委任されたのである。そのことについて、歐陽脩は次のように述べている。

竊かに以えらく、兵の勝負は全く處置の如何に由る。臣見るに、用兵以來、累次更改し、或は四路に都部署を置き、或は分ちておのおの一方を領す。乍ち合し乍ち離る、おのおの利害有り。（中略）或は曰く、「〔鄭〕戡、名は都部署と雖も、而るに諸路自らおのおの將有り。また其の大事は專制せしめずして、必ず朝廷に稟く。たとえ邊將、大事有るも先に戡に稟し、また朝廷に稟す。朝廷議定まりて戡に下し、戡始めて沿邊に下す。只だ此の一端、自ら事を敗る可し。其の失の二なり。」（『歐陽文忠公集』卷九七、論罷鄭戡四路都部署劄子）

陝西軍事路の分割策と統合策は、陝西における敗戦を契機として、たびたび更改されて搖れ動いてきた。それぞれに一長一短があるからである。そこで范仲淹らから鄭戡までは、二策を併用した形が取られたわけであるが、結局は効果を擧げることはできなかった。今の長官鄭戡の場合を見ても、單に軍政の意志決定を煩雜にしているにすぎない。それが戦果を得られない要因の一つにさえなっているという歐陽脩の指摘である。おそらくは、戦争の危機がようやく去りつつあるこの時期に、強力な裁量権限を持つ官職が地方に存在することは中央政府にとって好ましいことではないという理由も加わり、翌、慶曆六年（一〇四六）には、陝西諸路の經略安撫使、都部署司の便宜行事を罷めたので、⁽¹¹¹⁾名目の上でも、陝西における「攻守、進退、方略」の裁量権は政府の直接統制下にもどされることとなった。以後、陝西各路の經略安撫使がそれぞれ軍政官たちを統轄する體制が繼續して行われる。ただし、その中でも、永興軍の長官は陝西安撫使を名乗り、ほかの經略安撫使に優越する格付けがなされた。⁽¹¹²⁾それは不慮の際に、陝西の軍政の中心として、ほかの安撫使に率先して指導力を發揮するような含みを持たせたわけである。

三 經略安撫使の變貌

(一) 安撫使路の發達

陝西諸路の經略安撫使は軍政官を統轄し監督指導する官職として、制度上、一應の落ち着きをみた。その後、熙寧五年（一〇七二）に熙河路が創設されると、陝西は永興、鄜延、環慶、秦鳳、涇原、熙河の六軍事路となり、それぞれに經略安撫使が置かれる六路制へと展開した。⁽¹¹⁾ さかのぼって慶曆五年（一〇四五）以降には、ほかでも經略安撫使と同種の安撫使の路が相繼いで設置された。その年、知鄆州が京東西路安撫使、知潭州が荊湖南路安撫使を兼ねることになった。同年七月に知大名府が河北安撫使を兼任し、八月には、河東都部署、經略安撫使、判并州がおかれる。⁽¹²⁾ また、嘉祐五年（一〇六〇）七月には、知許州に京西北路安撫使を、知鄧州に京西南路安撫使を兼任させる。⁽¹³⁾ 安撫使の設置はこのように徐々にほかの路にも廣がる傾向にあったが、慶曆八年（一〇四八）に實施された河北の軍事四路制も、そのような安撫使路施行の流れのなかに位置づけられるものである。

河北の軍事路分割については、やはり慶曆五年（一〇四五）に遡って考えることができる。その年は保州の軍亂が勃發した翌年にあたり、當時河北安撫使であった程琳に下された次のような命令から、河北路軍政の實情の一端が知られる。

河北安撫司に詔すらく、聞くが如くんば、保州兵叛より、多く姑息に務め、恐るらくは軍情益々驕る。それ密かに主兵臣僚に諭し、常に撫御を加えしめ、如し敢えて輒りに軍律を犯す者は、また法外に施行するを聽す。〔長編〕卷一

五七、慶曆五年十一月乙巳

兵士たちの生活や訓練一般を管理する軍政がここで問題にされている。保州の兵亂は、河北における軍政が、すでに太祖、太宗時代を手本とし、武將個人の能力に依存するやり方では、もはやたちゆかないことを意味する事件であった。⁽¹⁴⁾ 兵

亂の鎮壓後、宦官を河北に派遣して、陣法を教習させたり、定州、北平軍の軍城寨、眞定府の北寨、滄州等々を河北縁邊安撫司に所屬させるなど、⁽¹¹⁹⁾河北の軍政改善について爲されたさまざまな試行錯誤の痕跡も窺われる。その決定打が、慶曆五年七月、程琳を河北安撫使に任命することであった。彼は次のように上言する。すなわち「河北の兵力は三路に分立して緊急の際にうまく連動しない。軍政の中心は河北の南端、北京大名府にあるのに、兵力そのものは北方の定州や眞定府に駐留している。司令部が、現場とはあまりにも離れた場所に置かれ、それが軍事行動の失敗を招く」ということを指摘しているのである。⁽¹²⁰⁾それは、四路をそれぞれ軍政上獨立させれば、兵力と戦略の効率をより高めることができるという主旨の提言であると考えられる。續いて程琳の後任として判大名府に就任した夏竦は、それを再検討することになったが、彼は以下のような意見を具申する。

請うらくは大名府、澶懷衛濱棣德博州、通利軍を以て建てて北京路と爲さん。四路おのおの都部署一人、鈐轄二人、都監四人を置く。平時は祇だ河北安撫使を以て諸路を總制し、警有らば即ちに北京に四路行營都部署を置き、嘗て兩府に任じたる重臣を擇びてこれと爲さん。⁽¹²¹⁾『長編』卷一六四、慶曆八年四月辛卯

程琳の原案が駐泊鈐轄と都監を置くだけにとどめていたものを、都部署や鈐轄、都監を増設、それらを河北四路それぞれに配置して、さらに大名府にいる河北安撫使に統轄させるという軍政組織の充實が目論まれている。また帥臣の人材を審査する任務など、⁽¹²¹⁾軍政改善を目指す方向がそこに顯著であった。にもかかわらず慶曆七年（一〇四七）十一月、再び河北の貝州において兵亂が起ることになる。そこで、時の河北安撫使の賈昌朝に、再度の改善策検討が命ぜられた。⁽¹²²⁾その結果、三代にわたる河北安撫使たちの出した結論は、河北の軍事路四分割案で一致をみたのである。軍政官による組織的な軍政運営は、國初以來それまで河北で支配的であった武將個人の能力に依存する風潮に、大きな轉換點を與えるものがあった。⁽¹²³⁾かくて慶曆八年（一〇四八）、河北は四つの軍事路に分割され、それぞれの安撫使によって統轄されることになったのである。具體的には、定州路を中央にして、東に高陽關路、西に眞定府路、南に大名府路を置き、それぞれの路に都

部署一員、路分鈐轄二員、路分都監四員を設ける。定州路は定州の知事、高陽關路は瀛州知事、眞定府路は成德軍つまり眞定府の知事がそれぞれ安撫使となり、都部署、鈐轄、都監らを統轄する。⁽¹²⁾なかでも大名府の長官は河北安撫使を稱して、河北の中心的存在となることは、陝西に倣うものであった。これらが、對契丹への防衛ラインの建て直しにも直結していたことは言うまでもない。

ところで河北では、既述のように雄州に河北縁邊安撫司が置かれている。それは河北の四つの安撫司とはどのような關係になったのか、一言しておく必要がある。主な問題は、軍政官を統轄する権限の行方であろう。それについて次の記事が参考になる。

左司諫呂謹初言えらく、定州、高陽關、帥を置き、至ってその事を重んず。刺探せる敵情、關報せる事宜、捕捉したる境賊姦細、屯田、塘水等の類の如きは、縁邊安撫司に付し、その他の軍政は悉く帥府に歸さん。これに従う。⁽¹³⁾宋會要『職官四一—九二、嘉祐二年十一月二十五日』

この記述にあるように、河北縁邊安撫司の諜報力を高陽關安撫使の軍政に生かす工夫もそこには見えるものの、雄州に鄰接する定州、高陽關の安撫使の出現により、軍政權は制限されると説明している。したがって、河北縁邊安撫司の軍政官の統轄權は、結局、雄州以外には及ばなかったし、河北全體の對契丹戰略の中では、事實上は河北安撫司の號令を受ける立場に置かれたと考えるべきであろう。

(二) 行政監督官への展開

全國各路の重要知府もしくは知州が安撫使を兼任して、管内の軍政官たちを統轄する方法は陝西での軍事路の展開とともに、各地で始ったことは既に述べたとおりである。その動きについて、司馬光は次のように述べている。

また、頃ごろ西鄙用兵を以て、經略安撫使を權置し、一路の兵を總べ、以て便宜從事を得。西事已に平らぐに及び、

困りて廢さず。(中略) 經略安撫使、征討の事有らば、則ちこれを置く。事無ければ、則ち當にこれを廢すべし。〔溫國文正司馬公集〕卷二二、謹習疏)

ここでは陝西用兵以來、經略安撫使が定制化しつつあることを最初に述べている。たしかに安撫使の任期が三年とされるなど、その定制化が進んではいたが、それにともない安撫使の職務も變貌しつつあった。その記事には續けて次のようにある。

儻しいまだ廢する能わざれば、則ち軍事迫急にして、奏知するに暇あらざるものは、これを専らにせしむるも可なり。その他の民事は、皆これを州縣に委ね一に法に斷すべし。或いは法重く情輕く、情重く法輕く、殺とす可く徒とす可く、宥す可く赦す可きは、並びに本州の申奏を聽し、これを朝廷に決す。何ぞ必ずしも經略安撫使より出ださんや。〔溫國文正司馬公集〕卷二二、謹習疏)

そこには、裁判の手續上、州縣が上級官廳の裁決を必要とする案件について、本來は朝廷に上申すべきものを、安撫使に裁決を仰ぐという實情であったことを指摘している。そのような事態に至った理由は、災害時の特別の場合の措置として、「安撫司に詔して賑恤せしめ、並びに刑獄の繫禁を察せしむ⁽¹⁷⁾」とあるように、刑獄實務を査察する權限が安撫使に許されていることが関わっていた。また、盜賊への處斷權限について「全國の罪人の裁決について、強盜して死に至るに、情輕きものは、安撫司、鈐轄司に詳斷させる⁽¹²⁸⁾」とあるように、邊防および軍人の犯罪、羣盜十人以上の盜賊團など凶惡な集團や犯人に、通常の法規では對處できない事件があり、これには安撫、總管(部署)及び鈐轄司に申し立てて詳細に調査した上で處斷し、上奏する⁽¹²⁹⁾。また盜賊追捕の際には、巡檢司に所屬する馬軍がないときは、本路の安撫司や鈐轄司に上申すれば、十人までは騎馬兵が派遣されるなどの命令が下されていたことも、その要因のひとつにあげることができる。このように安撫使に法制上の役割が付與されていたことは、行政監督を擔當する轉運使らとも、共同して事に當たること⁽¹³⁰⁾が一般的であったことを意味していると考えられる。これについても司馬光は以下のように言及している。

轉運使の規畫、號令、諸州に行下す。而るに諸州違戾して従わざるものは、朝廷當にその曲直を辨ずべし。若し事理實に施行すべきに、州將、貴勢を恃みて故らに違うのものは、當に州將を罪し、轉運使を罪すること忽かれ。(溫國

文正司馬公集』卷二二、謹習疏)

轉運司が單に上級監督官廳であると言うだけでは、實際の行政の現場では、かならずしもその命令が遵守されるわけではない。そこに軍事力の裏附のある安撫使の權限が必要となる。⁽¹³¹⁾この意味で、轉運使とともに行政監督の一端を受け持つことになるのは、上述した盜賊などの事例と同様に考えてよいだろう。⁽¹³²⁾安撫使、轉運使、提點刑獄の三者に盜賊數を検査報告する責任を與えたり、⁽¹³³⁾巡檢や縣尉などの仕事を監督する任務を課していることも、その傍證となるう。⁽¹³⁴⁾また、轉運使の安撫使兼任や、⁽¹³⁵⁾「經略、轉運司に詔する」という記述なども史書には頻出するが、それも安撫使と轉運司が行政監督官として、類似した立場にいることを示唆するものである。⁽¹³⁶⁾そのほかにも安撫使が轉運使らと共同で行う行政監督の實例は、和羅、兎役錢などさまざまな場面で見ることができ、⁽¹³⁷⁾なかでも、邊境で實施する政策や改革について、まず、經略安撫使にその利害を検討させよという命令は、まさに行政監督そのものを指示したものととして注目値する。⁽¹³⁸⁾

つまり、宋代の行政監督は、おもに、各地方の統治の實情に即して、政府と行政の現場である州縣の間に立ち調整を行うものである。その際、監督官に就いた人物が活動的であれば、政府への發言が多く、また、それへの對應としての詔も文獻中にしばしば記載されることになる。そうした場合にはあたかも強力な權限や幅廣い職掌を有していたかの如く見える。しかし人物が替わり、その活動が目立たなくなると、今度は逆にあたかも職權を失つて名目的存在にすぎなくなつたかのように判斷されやすい。つまり事實上、監督する範圍については、そこに就任した官員個人の力量に任ざれるところが大きかったと考えられる。そこから宋代の監司は「監督する官」であると言われ、行政長官とは區別される。また、宋代の行政監督には、統治の實務官である地方官員の勤務狀況を査察することもその中に含まれている。それを取りあえず「監察」と呼ぶことにする。宋の安撫使のおこなう監察の對象はまず州軍の知州にむけられる。「河北安撫、轉運司に詔

して本路知州軍の治狀を按察し以聞せしむ⁽¹³⁹⁾」といった記事は、安撫司が轉運司とともに知州の統治狀況を監察することをまさしく示している。さらに「知州軍の武臣はかならず屬僚と相談の上、裁決を決め、獨斷を許さない。それを監視する役目を、安撫使、轉運使、提點刑獄に課す⁽¹⁴⁰⁾」という記述もみられ、轉運司や提點刑獄とともに安撫使が監察する對象は、所部の都監、監押、寨主、巡檢使臣をはじめ⁽¹⁴¹⁾、その他に知州⁽¹⁴²⁾、通判⁽¹⁴³⁾、知縣⁽¹⁴⁴⁾、主兵官⁽¹⁴⁵⁾、その州の屬官⁽¹⁴⁶⁾などにも及んでおり、彼らの業績を評價して推舉することも、安撫使による監察任務の一つに含まれることがわかるのである⁽¹⁴⁷⁾。以上のように、安撫使が宋代の行政監督官をあらわす、いわゆる「監司」のひとつに數えられる要因をそこに確認することができる。

おわりに

宋初、太祖太宗の時期にあつては、武の優先する五代以來の政權の體質をあらため、文に換えていく方針が強力に進められた。地方においても中央の高級文官が任命される轉運使を中心として、路區分の整備が進められたことは周知の通りである。しかし五代軍閥體制の名残りをとどめた軍政統治の必要な地域が西方北方の邊境地帯には依然として存在した。そこでは軍閥統治以來の觀察使や團練使などの軍事をはじめ行政財政に至るまで、全權を握って軍政統治をおこなっていた。李漢超ら武人十四名餘を用い北西邊境地域を分擔させ、異民族を防禦させたのもそのひとつである。かれらの小さな過ちを咎めず、その地域の稅收入を自由に支出させ、また彼らが行う商取引への課稅を免除し、そのうえ軍事については大小となく便宜に裁量することを許したので、國初二十年間は西北邊境での外患はなかったという⁽¹⁴⁸⁾。

しかし、やがて國內の統一が完成し、宋の皇帝も三代目になると、從來の現實的な特例措置はなじまなくなり、邊境の軍政統治についても見直しが企られていた。景德元年（一〇〇四）、契丹と和議が成立するや、北方邊境の防禦態勢は新しい段階を迎え、軍政統治の方法もようやく改められる方向に進む。その代表的なものが河北邊境の要衝である雄州に縁邊

安撫使を設置したことである。從來は軍政の任務を有していなかった安撫使が、緣邊安撫使として軍政官を統轄し、かつ行政を擔當する州の長官と結びついて獨自な發展を遂げ、契丹との諜報活動や、邊境住民の統治に實績をあげた。それは後に、安撫使が行政監督官へと展開する一步ともなっていたと考えられる。そして、その方法を李元昊の侵入に悩む陝西に應用したのである。陝西では、河北の緣邊安撫使を發展させ、新たに經略安撫使として多數の地方軍政官を統轄させることになった。それ以前に、宋朝は、藩鎮から軍政權を取り上げ、都監、鈐轄、部署らの武官による軍政管理體制に切り替えたつあった。彼らは禁軍を指揮する軍政官で、中央政府の官職を持つ皇帝直屬の武官たちである。彼らを統轄する地位に經略安撫使らがおかれたわけである。それは、かつての藩鎮の機構に倣った新しい地方軍政の管理體制となった。しかし、党項との戦いの進展と共に、一人の總司令官に權限が集中することが問題化した。そのため、それを阻止する目的で、陝西を四路に分割して專權を抑制したり、あるいは逆に、その分割の弊害を改めるため再び陝西に複數の總司令官を置くなど、制度は動搖をみせる。一方、河北でも、次々と軍亂が勃發しており、そのことは國初以來の武將個人に軍政一般を委任する方法の行き詰まりを意味していた。そこで陝西での軍政統轄の仕組みを應用して、河北を四路に分割し、各路に安撫使を置き、軍政體制を一新する。それにより、河北各路の軍政の實務をきめ細かく管理して軍隊を掌握し、最終的に河北の防衛ラインの立て直しを計ったのである。やがて、ほかの路にも安撫使が設置されるようになると、州縣レベルの行政を中央の統制下に置くための強制力として、安撫使の權限が機能しはじめる。一部、裁判や盜賊追捕などの實務を伴いながら、轉運使や提點刑獄とは、結果的に行政監督の任務において補完しあう關係がみられた。そのため、安撫使にも州縣行政の監督任務が事實上認められていたのである。つまり、軍政官たちが任命される比較的小規模の區域の集合體である安撫使の路は、轉運使、提點刑獄などの路とともに、州縣を監督する區分であることが確認できるのである。

南宋に至ると、南渡直後の混亂時期には、金軍に侵入され、各地の知州たちは、そのたびごとに南宋政府の許可を得てから出兵するわけにはいかないという現實がそこにはあった。そこで各地の知州に發兵の權限と軍政官統轄の任務を與え

る必要が生じ、知州が安撫使を兼任し、管内の軍隊を掌握することになる。『宋會要』兵一四一七、建炎四年（一二三〇）七月三日の記事は、そのことを次のように述べている。

臣僚言えらく、竊かに見るに、比年、諸州守臣、申請して安撫使を帶し、便宜に指揮せんことを乞う。皆、任意を得たり。勝げて言う可からず。甚だしく便宜の本意を失すを。近ごろ已に諸州安撫使を罷む。而るに諸州、便宜に指揮し、いまだ明文の合に罷むべきもの有らず。いまだ當時、朝廷降せる便宜の指揮を審らかにせず。止だ安撫使を帶するの合に便宜を行ふと爲す。惟れ安撫使と便宜指揮を復す。是れ自り兩事、望むらくは朝廷、明降に指揮して罷去せん。これに従う。

つまり、南宋初期の知州たちは、政府の思惑などお構いなしに、自ら安撫使を稱して、その地方の軍政權を掌握するうに務めた。なかでも一路の大藩の知州は、その路の安撫使を兼ね、裁判に係わり、禁令を頒布し、業績評價を行い、あるいは財政や武器の名簿を査察する。重大議案は政府に上げるが、緊急を要する軍事や兵士の處罰については相應の裁斷をする。つまり一路の軍民事事の監督官へと變貌するのである。⁽¹⁴⁹⁾そしてこの南宋時代には、經略安撫使は都總管、鈐轄とあわせて帥司と總稱され、⁽¹⁵⁰⁾轉運使を中心とする監司と並んで行政監督官の代名詞として用いられるに至ったのである。

註

(1) 高承『事物紀原』卷六、安撫。

(2) 安と撫はどちらも「やすんずる」という意味をあらわす。

北宋の監察御史の張觀は上疏して「遠民は動き易く安んじ難し、意を専らにしてこれを撫んじ、猶おその所を失うを慮んばかる」（『續資治通鑑長編』（以下『長編』と略す。）卷三

二、淳化二年二月丁巳）と言う。

(3) 宿州火く。民の廬舍を燬くこと萬餘區、中使を遣り、安撫

す（『長編』卷一、建隆元年三月丁巳）。韓授、潘慎修ら八人

に江南・淮南・兩浙・陝西を分路巡撫させる（『長編』卷三

四、淳化四年（九九三）二月己卯）。長吏、夏州城からの移民を倍加安撫す（『長編』卷三五、淳化五年四月乙酉）。王欽若らを、四川安撫使・陝西安撫使とす（『宋會要』職官四一八一、咸平三年十月三日）。

(4) 體量安撫使とは、戰爭に限らず、自然災害にともなう飢饉

などが発生すると、危機管理のために當該地域へ派遣される臨時の使者を指し、縁邊安撫使や經略安撫使とは、區別しておかなければならない。一般に、安撫の命令は異民族との紛争解決(『長編』卷九〇、天禧元年十一月己亥)、流民の安堵(『長編』卷九三、天禧三年三月辛酉)、などの場面に見られるが、それらはすべて體量安撫使の任務のなかに含まれる。北宋時代を通して、體量安撫使が派遣されるが、經略安撫使が發展して、やがて各路の知州が安撫使を兼任する制度が行われると、體量安撫使はそれらに役割を譲ることになり、北宋末期にはほとんど見られなくなる。

(5) 『文獻通考』卷六一、安撫使。

(6) 『宋會要』職官四一八八、咸平四年八月。および『長編』卷四九、咸平四年八月辛丑。

(7) 『宋會要』職官四一八二。『長編』卷五八、景德元年十月庚寅。命兵部尚書、知青州張齊賢兼青・淄・濰州安撫使、知制誥・知鄆州丁謂兼鄆・齊・濮州安撫使、並提舉轉運及兵馬。

(8) 『宋會要』蕃夷一一三二、景德元年十二月九日。および『長編』卷五八、景德元年十二月戊子。

(9) 宮崎市定「宋代州縣制度の由來とその特色―特に衙前の變遷について」史林三六一二(一九五三)、梅原郁「宋代官僚制度研究」同朋舎(一九九二)。また近年、李昌憲「宋代安撫使考」齊魯書社(一九九七)が刊行され、その序文に宋代安撫使の概略を記す。

(10) 渡邊久「北宋時代の都監」東洋史苑四四(一九九四)、同

「北宋の鈴轄」龍谷史壇一〇七(一九九七)。

(11) 『長編』卷六二、景德三年四月乙酉。置河北縁邊安撫使、副使、都監於雄州。命雄州團練使何承矩、西上閤門使李允則、權易副使楊保用爲之、並兼提點諸州軍權場。『宋會要』職官四一八三を参照のこと。

(12) 『宋會要』職官六一一五、大中祥符九年三月。彼は天禧三年まで、凡そ十四年間、この職務に留まる。『長編』卷九三、天禧三年六月丁酉に、「李」允則、在雄州十四年。河北既罷兵。允則、治城壘不輟。遼主問其相張儉曰、聞南朝尙修城備、得無違誓約。儉曰、李雄州爲安撫使、其人長者。不足疑。既而有以爲言、詔詰之。允則奏曰、初通好不卽完治。他日如有頽圯、復安敢動。因此廢守備。臣恐遼人不可測也。帝以爲然。

(13) 『長編』卷二六二、熙寧八年四月戊寅。『長編』卷四九、元符元年六月戊寅。

(14) 『長編』卷七八、大中祥符五年七月壬申。および『長編』卷七二、大中祥符二年十一月乙卯。『長編』卷七四、大中祥符三年十二月癸酉。

(15) 『長編』卷七〇、大中祥符元年十月甲午。

(16) 『長編』卷一三七、慶曆二年閏九月戊戌。

(17) 『長編』卷二九七、元豐二年三月辛未。

(18) 『長編』卷二七三、熙寧九年二月乙未。『長編』卷二九五、元豐元年十二月丙辰。

(19) 『長編』卷二八一、熙寧十年四月丙午。『長編』卷五〇五、元符二年正月壬申。

- (20) 『長編』卷一六七、皇祐元年十月戊寅。
- (21) 『長編』卷四九四、元符元年二月庚寅。『長編』卷三〇一、元豐二年十二月辛酉。
- (22) 『長編』卷三〇九、元豐三年十月辛酉。
- (23) 『長編』卷七二、大中祥符二年十二月癸卯。
- (24) 『長編』卷一八二、嘉祐元年閏三月癸卯。
- (25) 『長編』卷二九四、元豐元年十一月乙未。
- (26) 『長編』卷四九〇、紹聖四年八月丁酉。
- (27) 情報活動の成果は、河東路西北邊の麟府軍馬司(『長編』卷一三七、慶曆二年六月辛巳)、河北路的大名府安撫司(『長編』卷三一六、元豐四年九月丁亥)、京東路安撫司(『長編』卷一三五、慶曆二年四月己卯)等々の機關に伝えられる。
- (28) 『能改齋漫錄』卷二、探事寮子。
- (29) 『長編』卷二九九、元豐二年七月甲戌。河北緣邊安撫司言、緣邊州軍主管刺事人、乞選募、人給錢三千、以使臣、職員或百姓爲之。緣邊安撫司・廣信・順安軍各四人、雄州・北平軍各三人、霸州七人、保州・安肅軍各六人。其雄・霸州・安肅・廣信軍四樞場牙人、於北客處鉤致邊情、乞選舉通判及監官考其偵事虛實、如至和元年詔賞罰。從之。
- (30) 『長編』卷二八一、熙寧十年三月乙亥。高陽關走馬承受王延慶乞令緣邊安撫司精選職員、使臣主掌刺事人。
- (31) 『長編』卷一六八、皇祐二年四月壬戌。
- (32) 『宋會要』職官五二一〇、景德元年十二月。
- (33) 『宋會要』食貨四一二、景德四年八月。其安撫都監二員、常巡邊郡。望令兼屯田事、因便檢校。從之。
- (34) 『長編』卷一六六、皇祐元年四月庚午。
- (35) 『長編』卷六七、景德四年十月甲午。詔河北諸州軍增葺城池樓櫓之具、令轉運使、緣邊安撫都監分往檢校。
- (36) 『長編』卷一八二、嘉祐元年三月己巳。
- (37) 『長編』卷五五、咸平六年八月壬午。
- (38) 前掲『宋代州縣制度の由來とその特色』、吳廷燮『北宋經撫年表』(『中國學報』一九一三↓中華書局 一九八四年)および『古今源流至論續集』卷七、郡守。逐州置軍營招兵。大都督有數十指揮、中郡有五七指揮、小郡亦不下三五指揮。每指揮、率以四五百人爲額。其軍餉給、悉在運司。其統制軍馬、乃隸守倅。如曰知某州軍州事、通判某州軍州事、軍乃軍政也。
- (39) 和田清『支那官制發達史』中央大學出版部(一九四二)。汲古書院(一九七二)。一八九頁に、示唆されている。『長編』卷七八、大中祥符五年六月戊申の條に安撫司と部署、鈐轄などの軍政官の密接な關係を示唆する。また後註(11)を參照。
- (40) 『長編』卷四七、咸平三年六月丁卯。
- (41) 『東都事略』卷一二〇。『宋史』卷四六六。
- (42) 『宋會要』職官四一一八三、景德四年三月十三日。
- (43) 『宋會要』蕃夷六一一、大中祥符八年二月。
- (44) 『長編』卷八五、大中祥符八年九月甲寅。
- (45) 『宋會要』職官四一一八五、大中祥符八年十月。
- (46) 『宋會要』禮六二一三四、大中祥符八年九月八日。
- (47) 『長編』卷八六、大中祥符九年三月己酉。

- (48) 『長編』卷八五、大中祥符八年十一月辛丑。
- (49) 『長編』卷八六、大中祥符八年三月丙午。
- (50) 『宋會要』兵一四一七、大中祥符九年九月。
- (51) 『長編』卷一二二、寶元元年十二月己卯。
- (52) 『宋會要』職官四一八八、天聖三年。
- (53) 『范文正公集』卷一三、范公墓誌銘。
- (54) 寶元二年正月丁酉、夏竦の推薦により、度支員外郎張昇が武官の六宅使・涇原秦鳳路安撫都監となる(『長編』卷一二三)。
- (55) また安撫副使には、殿前都虞侯・邕州觀察使・環慶副路都部署の劉平が拔擢された(『長編』卷一二三、寶元元年正月丙午)。さらに同年四月乙丑、同州觀察使・秦鳳路都部署曹瑋が本路安撫を兼任する(『長編』卷一二三)。
- (56) 『長編』卷一二三、寶元二年三月戊午。
- (57) 『長編』卷一二三、寶元二年四月丁卯。
- (58) 『長編』卷一二三、寶元二年五月丙午。
- (59) 『長編』卷一二三、寶元二年六月丙子。
- (60) 『長編』卷一二四、寶元二年七月癸卯。
- (61) 『長編』卷一二四、寶元二年七月甲寅。
- (62) 『長編』卷一二四、寶元二年七月戊午。
- (63) 『文獻通考』卷六二、經略使。經略使の職掌について『宋會要』職官四一七五には『哲宗正史職官志』を引用して次のように言う。云々總護諸將、統制軍旅、察治姦宄、以肅清一道。凡兵民之政、皆總焉。係邊任、則綏御夷狄、撫寧疆圉。若甲兵屯戍、芻粟饋運、則視其緩急盈虛、而移用之。掌凡戰守之事、即事干機速邊防、及士卒抵罪者、聽以便宜裁斷。
- (64) 『宋會要』兵八二〇、康定元年二月二日。乃命鎮海軍節度使・知樞密院事夏守斌爲宣徽南院使・陝府西路馬步軍兵馬都總管兼經略安撫使。
- (65) 『長編』卷一二六、康定元年二月壬辰。命夏守贊兼沿邊招討使。
- (66) 『長編』卷一二六、康定元年二月己丑。
- (67) 『長編』卷一二六、康定元年二月丁亥。
- (68) 『長編』卷一二六、康定元年二月甲午。
- (69) 『長編』卷一二六、康定元年二月庚寅。
- (70) 『長編』卷一二七、康定元年五月癸酉。
- (71) 三川口の敗戦の主たる責任者と見なされた范雍が經略安撫使の地位を追われる。そして、知同州・鄜州觀察使の魏昭昉を鄜州防禦使・陝州部署に、知鄜州の王德基を廬州都監に降格する(『長編』卷一二七、康定元年四月壬辰)。また、その敗戦の原因の一端を擔う鄜延路都監の黃德和を河中府で腰斬の刑に處し、さらに延州で梟首にした(『長編』卷一二七、康定元年四月丙午)。同じく宦官で鄜延鈐轄の盧守勲を湖北都監に、安撫都監の李康伯を均州都監に左遷した。通判延州の計用章は除名されて官員の身分を剝奪され、雷州に配流となる(『長編』卷一二七、康定元年四月辛亥)。このほかに、かつて李元昊の政敵である党項族の有力者、趙山遇の宋朝への亡命を許さなかった、延州の白波都監の郭勸と知延

州・鈴轄の李渭をあわせて降格している（『宋會要』職官四
—三九、康定元年三月六日）。

(72) 『長編』卷一二七、康定元年五月戊寅。

(73) 『長編』卷一二六、康定元年二月丁未・三月末。『長編』
卷一二七、康定元年四月己亥。

(74) 『長編』卷一二六、康定元年三月癸亥。

(75) 『長編』卷一二六、康定元年四月癸巳。

(76) 軍事の権限を戦闘指揮、發兵命令、軍隊管理の實務の三者
に分けて考えたとすると（『羣書考索』卷四四）、都部署のかわ
る軍政とは戦闘指揮以外の軍事上の實務全般をさしている。
陝西都部署は、その直轄する軍隊の管理實務全般、および
發兵権を擔當しつつ、陝西全體にかかわる軍政の取り締まり
を行うと考えられる。それは、由來を異にするものの、職務
権限について同じ軍政官である鈴轄と通じるものがあると思
考える。

(77) 張方平『樂全先生文集』卷二一、請罷陝西招討經略司事。

凡諸邊臣稟令招討司。機宜事會不失之急、即失之緩。勇者不
得施其力。智者不得專其謀。而又愛惡相攻、異同相戾。文檄
矛盾、人無適從。且朝廷設此司、所以使臂指相用、首尾相
救、決衆謀於獨斷、通四路爲一家。

(78) 『長編』卷一二八、康定元年七月乙卯。

(79) 『長編』卷一二八、康定元年八月癸未、乙酉。

(80) 『長編』卷一二八、康定元年八月癸巳。

(81) 『長編』卷一二八、康定元年八月庚戌。

(82) 『長編』卷一二八、康定元年八月辛亥。

(83) 『長編』卷一二八、康定元年八月壬子。

(84) 『長編』卷一二八、康定元年九月丙寅。

(85) 『長編』卷一三〇、慶曆元年正月戊辰。

(86) 『長編』卷一二九、康定元年十二月甲辰。

(87) 『長編』卷一三〇、慶曆元年正月己卯。

(88) 『長編』卷一三一、慶曆元年二月丙戌。

(89) 『長編』卷一三一、慶曆元年四月辛巳。

(90) 『長編』卷一三一、慶曆元年四月癸未。

(91) 范仲淹の解任のあと、陝西都轉運使の龐籍が知延州兼鄜延
路都署司事として軍政を擔當した時、蕃族との交渉には別に
專任の秦隴蕃落使が置かれたことは（『長編』卷一三二、慶
曆元年五月己酉）、安撫使の職務に含まれている實務上にお
ける異民族との交渉の職權を獨立させたものであり、范仲淹
の獨走を許す一因となった職權を安撫使から奪う意圖もあつ
たと考えることもできる。

(92) 王曾瑜『宋朝兵制初探』中華書局（一九八三）。

(93) 『長編』卷一二九、康定元年十月乙未。

(94) 『宋會要』兵一四一、康定元年九月。詔知永興軍夏竦
等、凡保軍期急速及攻守・進退・方略應機制變、奏覆朝廷不
及者、並許便宜施行訖以聞。

(95) 『長編』卷五二、咸平五年七月丙申。以鄆州觀察使錢若水
爲并代經略使、判并州。上新用儒將、未欲使兼都部署之名、
而其實同也。

(96) 『長編』卷一二九、康定元年十二月癸未。

(97) 『長編』卷一三一、慶曆元年四月甲申。

- (98) 陳執中の副官には、曹瑋を陝西副都部署兼經略安撫招討副使に拔擢した。また、陝西鈴轄を設けて、そこには環慶鈴轄の杜惟序を昇格させる（『長編』卷一三一、慶曆元年四月甲申）。さらに陝西安撫招討都監なる官職には趙珣を拔擢する（『長編』卷一三二、慶曆元年五月戊午）。
- (99) 『長編』卷一三二、慶曆元年五月辛未。
- (100) 『長編』卷一三二、慶曆元年七月己酉。
- (101) 慶曆元年、豐州が陥落した。また、麟州・府州に李元昊軍が侵攻して死傷者は三萬人を數える被害をもたらした。これが夏竦・陳執中更迭の直接の契機になった。（『長編』卷一三四、慶曆元年十月甲午。於是兩人俱罷、始分陝西爲四路焉。
- (102) 秦鳳路に樞密直學士・起居舍人・管勾秦鳳路部署司兼知秦州の韓琦を、涇原路には樞密直學士・刑部郎中・管勾涇原路部署司兼知渭州の王沿を、環慶路には龍圖閣直學士・戸部郎中・管勾環慶路部署司兼知慶州の范仲淹を、そして鄜延路には龍圖閣直學士・禮部郎中・管勾鄜延路部署司兼知延州の龐籍を任命し、かれらにそれぞれ本路馬步軍都部署・經略安撫縁邊招討使とした（『長編』卷一三四、慶曆元年十月甲午）。
- (103) 『夢溪筆談』卷一、故事一。都總管、副總管、鈴轄、都監同簽書、而皆受經略使節制。梅原郁譯『夢溪筆談』第一卷二二～二四頁、平凡社、一九七八。使院と州廳については、前掲『宋代州縣制度の由來とその特色』。
- (104) 『長編』卷一三五、慶曆二年正月癸丑。
- (105) 『長編』卷一三八、慶曆二年十月戊辰。
- (106) 『長編』卷一三八、慶曆二年十一月辛巳。
- (107) 『長編』卷一三八、慶曆二年十二月壬戌。
- (108) 『長編』卷一三九、慶曆三年正月丙申。
- (109) 『長編』卷一三九、慶曆三年正月辛卯。詔陝西縁邊招討使韓琦、范仲淹、龐籍、凡軍期申覆不及者、皆便宜從事。
- (110) 『長編』卷一四六、慶曆四年二月甲寅。
- (111) 『長編』卷一五八、慶曆六年二月丁卯。罷陝西諸路經略安撫使・都部署司便宜行事。其緩急賊馬入寇、應機制變、不及中覆者、聽之。
- (112) 『長編』卷一五八、慶曆六年二月癸丑。程琳が武昌節度使、陝西安撫使、知永興軍として赴任する。また、陝西安撫使と陝西四路との關係については、『宋會要』職官四一―八九、慶曆六年三月丁酉に「陝西四路經略司に詔して、凡そ民間の利害、及び邊事は、並びに知永興軍陝西安撫使程琳に報ぜしむ」とある。また、范仲淹が陝西四路縁邊安撫使に復歸することがあるが、それは一時的なものにすぎない（『范文正奏議』卷下、奏乞罷參知政事知邊郡）。
- (113) 『長編』卷二三九、熙寧五年十月戊戌。『長編』卷二四二、熙寧六年二月丁酉。懷一雄「王韶の熙河經略について」『蒙古學報』一、一九四〇。
- (114) 『長編』卷二四〇、熙寧五年十一月壬申。
- (115) 『長編』卷一五四、慶曆五年正月乙酉。富弼を京東西路安撫使・知鄆州とする。同五年三月壬戌。知潭州劉沆、荊湖南路安撫使を兼ねる（『長編』卷一五五）。同年七月戊子。知大名府程琳、河北安撫使を兼ねる（『長編』卷一五六）。同年八月庚午。夏竦を河東都部署・經略安撫使・判并州とする（『長

編』卷一五七。

- (116) 『長編』卷一九二。嘉祐五年七月辛卯。詔知許州兼京西北路安撫使、知鄧州兼京西南路安撫使。以許陳鄭滑孟蔡汝頌信陽九州軍隸北路。鄧襄隨房金唐均鄧光化九州軍隸南路、其河南府即不隸所部。また、『長編』卷二八〇、熙寧十年二月乙巳。詔自今處州知州更不帶安撫、鈐轄、依舊令洪州知州兼領。とあり、江南西路にも安撫使もしくは鈐轄が設置されていた。

- (117) 『長編』卷一五六、慶曆五年閏五月癸丑。河北都轉運按察使歐陽脩の上言。および『長編』卷一五七、慶曆五年八月壬午。監察御史李京の上言。

- (118) 『長編』卷一五五、慶曆五年五月己卯。

- (119) 『長編』卷一五六、慶曆五年六月乙丑。

- (120) 『長編』卷一六四、慶曆八年四月辛卯。程琳自大名府徙永興軍、上言曰、河朔地方數千里、連城三十六。民物繁庶、川原坦平。自景德以前、敵數入寇、官軍雖衆、罕有成功。蓋定州、眞定府、高陽關三路之兵、形勢不接、召發之際、交錯非便。請建都全魏以制北方。而兵隸定州、眞定府路、其勢倒置。請分河朔兵爲四路。以鎮定十州軍爲一路、合兵十萬人。高陽關十一州軍爲一路、合兵八萬人。滄霸七州軍爲一路、合兵四萬人。北京九州軍爲一路、合兵八萬人。其駐泊鈐轄、都監、各掌訓練、使士卒習聞主將號令、猝緩即成部分。

- (121) 『長編』卷一五八、慶曆六年六月庚戌。

- (122) 『長編』卷一六〇、慶曆七年三月乙未。

- (123) 『長編』卷一六四、慶曆八年四月辛卯。

- (124) 『長編』卷一六四、慶曆八年四月辛卯。

- (125) 『宋會要』職官四一一九一、至和元年六月十二日、高陽關路都總管兼安撫使・知瀛州陳升之言、乞下雄州及沿邊安撫司、今後每體探事宜、並關報本路安撫司。詔河北沿邊安撫司、候有緊急事宜、施行訖即便關報。

- (126) 『長編』卷一七八、至和二年二月甲午。

- (127) 『長編』卷二八四、熙寧十年八月己卯。

- (128) 『長編』卷四四二、元祐五年五月壬申。

- (129) 『長編』卷三七六、元祐元年四月辛亥。尙書省言、羣盜作過、事出倉猝、稍失處置。恐別致生事。自來、未有指揮、許本路安撫、總管、或鈐轄司酌情處斷。今、將元條添修、事干邊防及機速軍人犯罪及羣盜十人以上、難依常法者、申安撫、總管及鈐轄司詳酌處斷訖奏。從之。

- (130) 『長編』卷三九八、元祐二年四月戊戌。

- (131) 安撫使の管轄する軍團の規模について、廣西を例にとると、皇祐四年十月壬辰の、樞密副使王堯臣の上言により、「廣西を宜州、容州、邕州の三路にわける。そこに武臣を選んで安撫都監兼知州事とする。知桂州には兩制以上の官位を持つ文臣を長官とし、經略安撫使を兼任させて、武臣を統制する。その方法は、鈐轄二名を交替で邕州に出張させて安撫都監を統制する。その他に、走馬承受二員を設けて、中央の意志を反映するよう工夫する。兵力は、邕州に四千人、宜州に二千人、賓州に一千人、貴州に五百人とする」(『長編』卷一七三、皇祐四年十月壬辰)とあるので、廣西經略安撫使は、安撫都監や鈐轄を通して、七五〇〇餘の兵力を統轄する

ことになる。この他に左右江巡檢、寨主、指使らの兵が、それぞれ各三百人あり、それを含めると更に多くなる。慶曆五年十一月乙未の記事にこうある。「詔すらく、邊事寧息し、盜賊衰止するを以て、知鄆州富弼、知青州張存、並びに安撫使を罷む。知鄆州范仲淹、陝西四路安撫使を罷む。その實、讒者、石介、亂を謀り、弼、將に一路の兵を擧げこれに應ぜんとするを謂うの故なり。仲淹、先に疾を引きて邊任を解かれんことを求む。是の日、知鄆州に改めらる。」(『長編』卷一五七) 謀反の眞偽はおくとしても、知鄆州は京東西路であり、すでに安撫使の官職に軍團を動員する権限があることがわかる。

(132) 轉運司は安撫使の軍費の豫算枠を監視する。(『長編』卷一六四、慶曆八年七月甲辰)。また元豐六年三月辛卯。詔廣西邊事申經略司處置失當及有未盡、許轉運提點刑獄司具事理聞奏(『長編』卷三三四)。とあり經略司の失敗や未解決な問題についても轉運使と提點刑獄が監視する。

(133) 『長編』卷一六五、慶曆八年十二月辛巳。詔河北、京東西路安撫、轉運、提點刑獄司籍諸州軍所申盜賊數、嚴督官吏捕逐之、每半月據所獲入、馬遞以聞。

(134) 『長編』卷一七〇、皇祐三年四月戊申。詔比者、齊鄆棣博等州、寇盜羣起、其令巡檢、縣尉會合捕討之。其不任職者、安撫、轉運、提點刑獄司察舉以聞。

(135) 『長編』卷一四八、慶曆四年四月丁酉。慶曆四年四月丁酉に杜杞が刑部員外郎、直集賢院、廣南西路轉運按察使兼安撫使となった。

(136) 『長編』卷一五七、慶曆五年九月壬寅。

(137) 和羅について、『長編』卷四〇〇、元祐二年五月乙卯。詔令河東轉運、提點刑獄、提舉常平司、與經略安撫司同相度立法以聞。とある。また、免役錢の實情調査について『長編』卷二五一、熙寧七年三月庚戌に、又詔聞鎮定州民有拆賣屋木以納免役錢者、令安撫、轉運、提舉司體量、具實以聞。とある。軍事については、兵官の人材監察に經略安撫、轉運、提點刑獄が關わる。『長編』卷一九一、嘉祐五年二月甲子の記事に、詔河北、河東、陝西、廣南東西、荊湖南北路經略安撫、轉運、提點刑獄司體量所部兵官、有不能訓戢軍旅、肅靜寇姦者、密以名聞。とある。

(138) 『宋會要』職官四一七七、元祐二年六月二十二日。詔自今沿邊臣僚臣僚奏請創置更易事、並先付本路經略安撫司詳度利害以聞。

(139) 『長編』卷一六八、皇祐二年三月己丑。右司諫陳旭の奏請。

(140) 『長編』卷一七五、皇祐五年閏七月乙亥。詔諸路知州軍武臣、並須與僚屬參議公事、毋得專決。仍令安撫、轉運、提點刑獄司常檢察之。

(141) 『長編』卷一九二、嘉祐五年七月壬寅。詔廣南東西等路安撫、轉運使、提點刑獄體量所部知州軍、都監、監押、寨主、巡檢使臣、老疾不任事者、即選人代之以聞。『長編』卷三六五、元祐元年二月庚申朔、辛酉。詔京東西、淮南安撫、轉運、提刑司、體量巡檢、縣尉老疾不任職之人、選官對移或奏差、具因依以聞。

(142) 『長編』卷四〇二、元祐二年六月甲辰。

(143) 『長編』卷一八五、嘉祐二年正月己亥。詔以桂州帶一路安撫使、聽學通判一員。

(144) 『長編』卷一七七、至和元年十一月壬午。又詔湖南鄴溪峒諸縣、其令本路安撫、轉運司舉官爲知縣、歲滿京朝官免入選、選人與免選。

(145) 『長編』卷三三六、熙寧五年閏七月乙亥。詔諸路安撫及文臣帶路分鈐轄舉官堪知州軍、主兵官各一員。轉運、提點刑獄舉知州軍一員。武臣總管、鈐轄、安撫舉主兵官一員。

(146) 『長編』卷三七五、元祐元年四月庚子。詔三路知州帶安撫使者、許奏辟本州官二員。餘路知州帶安撫使、大中大夫以上帶一路鈐轄及知河南府應天府、不以官敘知雄州、各許奏辟本州官一員。使相及曾任執政官、添舉一員。雖不係合辟本州官處、亦許奏辟本州官。云々。

(147) 安撫使の州縣にたいする通常の監督は「諸て文書の司に下さざる者は、長官これを掌る。年月事類を以て相次目に録し籍に注す。若し替移有れば、籍を驗し交受す。緣邊の事、邊防軍機、地界要切に干する者は、事目及び亡失の有無を具して安撫、總管司に申す。其の安撫總管到罷するは、また此に准じ樞密院に申す」(『慶元條法事類』卷四、職掌の職制令)。

とあるように、軍政關連の文書を媒介として、單に特別な評判による業績の評價だけではなく、通常の任務についても對象としている。なかでも優れた業績を収めた地方官に對しては、相應の顯彰なすべく進言する。嘉祐四年六月癸酉の條に、「諸路安撫、轉運、提點刑獄に詔して、おのおの所部に於いて見任文資行實敦樸にして政事の才有り、升擢に備う可き三人を舉げしむ」(『長編』卷一八九、嘉祐四年六月癸酉)という推舉の權限が認められている。

(148) 『古今源流至論續集』卷二、兵權。國初、董遵誨、李漢超之徒、分守邊郡、許令召募驍勇以爲爪牙、軍中諸事許從便宜。二十年間、無西北之憂、蓋郡守有兵權也。

(149) 『宋史』卷一六七、職官志七、經略安撫司。皆帥其屬而聽其獄訟、頒其禁令、定其賞罰、稽其錢穀・甲械出納之名籍而行以法。若事難專決、則具可否具奏。即干機速、邊防及士卒抵罪者、聽以便宜裁斷。

(150) 『宋會要』職官四一一二九、政和六年四月一日。「伏して走馬敕を觀るに、諸て帥司と稱す者は經略、安撫、都總管、鈐轄司を謂う」。その原注には次のようにある。麟府路軍馬、瀘南緣邊安撫、保州・信安軍・安肅軍都巡檢司も同じ。

A STUDY OF JING-LUE AN-FU SHI 經略安撫使 IN THE NORTHERN SONG DYNASTY

WATANABE Hisashi

In this paper, I tried to clarify the real image of “An-fu shi” 安撫使 in the Song dynasty and pointed out its role in Chinese history.

There were three types of the “An-fu shi” in the Song. Ti-liang an-fu shi 体量安撫使 had a traditional assignment to keep peace. The task of Yuan-bian an-fu shi 緣邊安撫使 was emphasized with supervising persons who performed military administrative duties. Jing-lue an-fu shi 經略安撫使 also shared this task and was authorized to command troops directly as well.

Since the Five dynasties separate military powers had been taking shape in the provinces, the Song dynasty had to dismantle them so as to advance centralization. For this purpose, the central government of the Song sent some military supervisors, who were under the direct control of the Emperor, to the provinces as one of the ways to take away their military authority. Still more, it sent the “An-fu shi” to control these supervisors. As it was necessary for the “An-fu shi” to use its military authority to carry out the orders of the central government, it began to supervise not only the military but also the administration of the provinces.

FUNCTION OF AMENDS FINE LAW IN TRADITIONAL CHINESE PENALTY SYSTEM —IN LIGHT OF COMPARISON BETWEEN THE CON- CEPTION IN THE CRIMINAL LAW CODE OF THE TANG 唐律 AND LEGAL PRACTICE IN THE MING—

Arnd Helmut Hafner (SUEYASU Ando)

Under influence of the conception in the criminal code of Tang, amends fines 贖刑 are usually understood mainly as a privilege of